

川北温山論（中）

第四章

徙居有感

奥村孝亮

温山に「徙居有感」と題する五言律詩の長い詩がある。一韻到底格という押韻の都合から使用された文字は決して平易でない。しかし詰屈晦渋ということはない。小さな自伝とも言える内容である。

生為善病人	臨食常嘔吐	加之貧且窶
日承世人侮	萬事無所成	幽憂祇自苦
年甫十有五	立志向鄒魯	妙齡列門蔭
薄俸蒙任補	恰似吞舟魚	俯首就網罟
方壯失所持	猶弱喪所怙	孑立志益堅
徧探詩書府	抗然藩邸中	世教謀拘拄

時運其如何	若日將過午	上下皆危疑
嘖嘖口徒咻	藩主事勤儉	修飾理紛縷
恩廻春天風	惠瀑夏日雨	廟祀祖先饗
嶽瀆鬼神舞	舉彼紛紛說	紅爐雪一炷
病夫逢此時	謬為鵷鷺伍	官叨辱樞機
学僅張門戶	慨然有所懷	謀議傾肺腑
眇眇散樗資	何能当良梗	譬如把藁條
来支大廈廡	静言思顛末	長嘆胸幾撫
西州有知己	諭予專考古	東都人文叢
有矐又有矩	逍遙孔孟衢	直窺堯舜宇
傍遊文墨場	玫瑰任手取	江潮欲抽身
不忍負賢主	但修封邑史	未足荅化煦
百爾不遺予	珷玞比瓊瑤	寵秩亦屢加
無由臥萊菴	徒居公園隅	花卉手自樹
退食堪養痾	飲酒日嘖嘖	

私は生れつき多病で食事の度毎に嘔吐するという状

態です。おまけに貧乏でやせおとろえています。日々世人の侮を受けるばかりです。何事も成就するところがありません。物憂くてただ自分一人で苦しむばかりです。

十五才にして志を立てて孔子の教の道にはいりました。若くして父祖の功績によって官職を授かりました。給与は少ないのですが役人となりました。言うなれば吞舟の魚が網にかかったようなものです。三十才にして母を失いました。なお二十才のとき父を失っています。しかし孤独になりながらも志だけはまだます堅くなりました。一途になって詩書の文庫を探索しました。藩邸中でも頭を高くしていました。そして世間ののけものになりました。私の運命はどうなったでしょう。

ちようど日が将に午を過ぎるが如くおとろえるばかりであつたので上下皆危く思つたようです。口々によかましくうわさしました。

藩公は勤儉を事とする方でした。道理が乱れているをつくろい正しました。

藩公の御恩は春天の風の如く、御恵は夏日の雨の如くであります。

御馳走を作つて祖先をお祭りし、山や川の神に祭りを献じました。

かのやかましい意見をとりあげて、きれいに始末されました。それはちようど、真赤ないろりの上に雪をおくみたいでした。

この時に當つて病気がちの私も誤つて官場界にはいりました。かたじけなくも樞機に参与することになりました。

学者としてはわずかに門戸を張るだけですが、慨然として思うところはあります。一生けん命になつて企画にあずかることもありますが、お役にもたないつまらぬ力をかすだけです。どうして能吏と言えましょう。たとえば、わらすばをもって来て

大きな家をささえるみたいです。静かになりゆきを語って長嘆して胸をさすります。

九州の友人は、君は歴史の研究に力を尽しなさいと言ってくれます。

江戸の学界には自らわくがあるようです。孔孟の学問をあちこちとする人もあれば、直ちに堯舜の道を探ろうとする人もいます。文学の世界をたのしむ人も居ります。思い思いによいものを取っているようです。

退官して民間に帰ろうと思いますが、賢明な藩公にそむくことになりますので、それはいたしかねます。そして役人の世界にとどまっています。藩の歴史をおさめているのみで、ご恩におむくいすることができません。

しかるに藩公は私をお忘れなく、つまらないこの身を玉の様に大事にしてくださいます。藩公にしばしばかあいがつてもらっています。退官する理由が見

つかりません。

公園の隅に居をうつすことになりました。手づから植木をうえ、お役所から退いてはゆっくりして、もっぱら病を養うのみです。そして毎日酒を飲んで楽しむのです。

この長詩は、何時、何処で書かれたものであろうか。先づそれから考えてみたい。

温山は嘉永六年（一八五三）に五十七才で亡くなっている。

詩中（若日将過午）とあるから、壮年以降の作という見当はつく。

さて彼は、藩主から大きな寵愛を受けていることを言っている。温山は藩主忠侯（のり）に若くして仕えている。その忠侯は天保十一年（一八四〇）に歿している。

天保十一年には温山は四十六才である。

だから温山の四十六才以前の作、しかも四十六才から

それほど遠くにさかのぼることはないだろう。（日は将に午を過ぎんとする）と言うのであるから、温山の四十才過ぎてからの作と見ておおよそまちがいなからう。

なおまた、文公忠侯は、その事蹟は、（藩主は勤儉を事とす、修飾して紛縷をおさむ）という表現にふさわしい。

詩中の藩主を忠侯と考えることは、ほとんどまちがうことはなからうと私は思う。

次に何処で書かれたものであろうか。

（居を公園の隅に移す）と詩に言っている。

温山の詩の中から「公園」の語のある詩を探ってみよう。

(1) 「假公園招古賀博士」

公園緑樹鬱森森

幽邃也知恩寵深

(2)

丘塢自為一日賜
水泉湛洗千回心
魚嫌醉客多潜伏
鳥近騷人来伴吟
遺却買山他日念
官身暫著薜蘿衾

「八月初五日黒別荘小集大槻磐溪

山内香雪宮原桐月本間遊清諸子来会」

暫借公園放病身
潜魚飛鳥且相親
香厨芳甕生賓客
明月清風舊主人
矮樹林疎全露嶽
懸流水漲不浮塵

四郊久已無營壘

一曲謳歌荅泰辰

(3) 「永峯坊公園小集」

少小耽泉石

志在白雲隈

塵羈未全解

官途枉徘徊

驪山公園在

聊得好懷間

杪秋風霜慘

百卉日夜摧

招邀皆良友

撫景斟新醅

瀾語間戲謔

酣醉各喧祿

尋詩攀危石

投竿坐綠苔

山迎夕陽紫

水帶昨雨廻

已逃名利境

頓覺宇宙恢

一聲山鐘響

暮色自遠來

（公園を假りて）とか（公園を借りて）とあり、（幽邃^{また}也知る恩寵の深きを）とあることからして、これらの公園は、島原藩公の所有のように思われる。

そもそも公園という言葉は、中国では北魏の時代五世紀の頃にはじまる。官有の庭園という意味である。その言葉は日本に伝わる。大名つまり藩公の庭園（Lord Garden）という意味は江戸時代に於ては普通の用語のようである。江戸時代における藩公の庭園として有名な

ものは岡山の池田氏の後楽園、金沢の前田氏の兼六園等であるが、松平定信の白河の南湖園、徳川斉昭の水戸の偕楽園などは公開されてもいたようである。岡山の津山松平氏の衆楽園もそうであつたらしい。

温山の詩に見える公園は島原藩公の庭園であると見てほとんど誤りはなからう。

(ちなみに、公衆の慰安・遊樂のための庭園という意味での“公園”は、明治六年一月に公布された太政官布告第十一号(社寺其他名区勝跡ヲ公園ト定ムルノ件)による。つまり「萬人偕楽・保健・観賞の地としての公園」が設定されたのである。)(1)

温山が朋友知人を招いて宴を催していることから、島原藩では、藩士など一部に開放される場合があつたのであろう。

島原藩は、数寄屋・三田・目黒と三つの屋敷を所有している。

温山の秘鑑抄には、封域門の項に、目黒抱屋敷が載つ

ており、二万一千七十三坪増上寺御靈屋領年貢地となっている。

目黒屋敷とみるなら、(2)の詩の題辞中の目黒別荘はそれだとも考えても自然である。

これらの詩の作成時期を考えてみる。

(1)の詩の句(魚嫌酔客多潜伏。鳥近騷人来伴吟)は、(2)の詩の句(潜魚飛鳥且相親)と、その心象風景が甚だ近い。

(1)・(2)の詩ができた時期はほとんど前後すると推測してもよい。

大槻磐溪は仙台の人、明治十一年に歿する、七十八才。山内香雪は会津の人、萬延元年(一八六〇)に歿する、六十二才。宮原桐月は松山の人、天保十四年に歿する、七十五才。

本間遊清は不明。然れば(2)の詩は天保十四年以前のものである。

(1)の詩の古賀博士は佐賀藩儒古賀穀堂である。穀堂は

精里の子。精里は文化十四年（一八一七）六十八才でなくなった碩学である。この時温山は未だ若冠二十三才である。

穀堂は、温山がその盟友である詩の文社、海鷗社の盟長である。穀堂は天保七年（一八三六）に歿している。そこで(1)の詩は天保七年前にできている。

(1)の詩第七句の買山とは、（隠退せんがために山を買う）の意味であり、第七・第八句の意味は、（いつか隠退するのであるが、そのための準備をする気持を捨てて、しばらくは官吏の世界にとどまってかづらの着物を着ておこう）と解すべきである。

これは徙居有感の心境と一致する。

それはまた、(3)の詩の二句・三句（塵羈未全解、官途枉徘徊）と密につながると感じられる。永峯坊公園についてでは明らかにすることができないが、九・十句以下の（お迎えした方々は皆りっぱな友人であり、風景をたのしみながら新酒を汲み交わす云々）の叙事があることか

らして、この(3)の詩のできた時期は(1)・(2)の詩と大体に於て同時期と見て大差なからう。

しかも(1)・(2)・(3)の詩の心境なり叙景なりが「徙居有感」歿と甚だ近縁にあるものと推察されるのであって、「徙居有感」の書かれた場所を江戸であり、島原藩公の抱屋敷の目黒であると考えたい。

それはまた、「徙居有感」の中の句、（西州に知己あり、予に論して言う”考古を専にしなさい”と、東都江戸の文学界、云々）の語調には、西州つまり西国肥前の土地島原に在住しているという現在感がその行間にみなぎっていないことから、そう考えることを強める。

「徙居有感」には（封邑の史を修む）の詩句がある。

後述する如く温山の歴史書には原城紀事があるが、その作成時期は天保の末年と思われる。他に秘鑑抄がある。それは甲午の年天保五年に作られている。

封邑の史とは国家の史である。島原という藩国家の歴史である。修とは修史の語に見る如く（書物をつくる、

書く)である。

然れば「徙居有感」の中に見えるこの封邑の史は明らかに秘鑑抄であろう。

出来上ったかどうかは一応おくとして、ここに至って「徙居有感」が天保五年前後と見ることは許されてよい。加えて言っておきたい。

温山に観梅記という文章がある。

これは羽倉県令が文社に於て出した課題に応じたものである。蒲田・六郷河・川崎・品川等々を巡り歩いた記録である。

癸巳の年天保四年のことである。

羽倉県令とは、温山が大塩中斎から洗心洞割記を贈られて、それに対しての礼状の終りの方に、一読したら羽倉県令にさしあげたいと存する旨を記している、その羽倉県令と同一人物である。この礼状は天保四年の頃に書かれている。(第二章参照)

すでに述べた如く、温山の島原入国は、文政二年(二

十六才)、文政六年(三十才)、文政十二年(三十六才)の三度であったことははっきりしている。

文政十二年、その年十二月改元して天保元年である。

おそらく温山は先述したとおり、文政十二年、島原に滞在することわずかで東帰して江戸にもどったであろう。少くとも天保初年の頃にはすでに島原を離れていると思う。

明確に言うことができないのは誠に残念であるが、「徙居有感」もおおよその頃に書かれたものではなからうか。

「徙居」をその様に解することは少しうがち過ぎるであらうか。

「徙居有感」に於て温山は、しきりに退官の意あることを言っている。

一般に官界にある人が、自分がその職に当らずとする謙讓の意をこめて退官したいと語ることが珍らしくない。

温山の場合もその例であらうか。

あるいはまた第三章に於て述べた彼のいわゆる“俗吏・俗務”に対する不満感にでも由来するのであろうか。

温山は決して強壮な方ではなかったようだ。（生れてよく病む人となる）にはじまる「徙居有感」には、彼が病弱であつたらしい様子がうかがわれる。

病弱の身では早く退官したいという氣持が起つて来るのは自然であらう。

病弱の原因が何であつたかははっきりしないが、天保初年からお十数年を生きたのであるから、やはり学問好きの人にありがちな勉強過ぎての胃弱などから来た病身であつたのであらう。

彼は天保初年に側用人になつたらしく思える。（謀議肺腑を傾く）とは、藩公側近として思慮を尽さねばならぬ重職の多忙さを窺わせる表現である。

とすれば、その本意に反してなお職務を投げ出すわけにゆかない事情にあつたであらう。状況を推察できるやうだ。

「徙居有感」はすばらしい大作の文学とは言えまい。

しかし彼の文人としての、士人としての情感はたしかに測々として伝わって来る。

ここで冗言とは思えるが文学論を云々することを敢てしたい。

社会的動物である人間は、社会を離れて生きて行けるものでない以上、当然のこと心の葛藤に苦しむ折々があらう。喜び、悲しみ、嘆き、憂い、苦しみ、悩み、もだえ、怒り、くつろぎ、楽しみ、あこがれ、のぞみ、その情感はいろいろであらう。まぬかれ難い人間の宿業である。

人間はこれらの情感を、あからさまに表情にあらわし、動作に出し、声に出すことによつて、その重々しい心の憂さを一時的にもはらいのけることもあるうし、歡喜の情をいやが上にも高くすることがあらう。

しかし人間の世の中は、その様な自由な解放された状況にいつもあるわけではない。

この様なとき、敢て挑戦するか、あるいはじつと苦しみにたえるか、決意を迫られる時がある。苦しみに埋没して生を終るか否か正に人間非常の秋である。

実はこの時文学が生れる。(文芸と言った方が適確かも知れない。)

潜在意識の海の底の深い／＼ところに伏在している苦悶、即ち心的傷害が象徴化せられたものでなければ、大芸術ではない、とは厨川白村の言葉である。文芸というのは正にそういうものであろう。

文芸というものは、人生に於て私たちの内部に喚起されたもの、言うなれば情緒、思想を、言語または文字によって表現したもの——言語芸術である。それは形式によって、詩歌・戯曲・物語・評論・随筆等々と分けられるのである。

文芸は決して散漫なみだり言ではない。

情感が論理的に凝縮されるものでなければすぐれた文芸とはなるまい。

私は今論理的に凝縮されると言ったのであるが、これは決して、科学的、合理的という意味では言っていない。予感や決意や激情をあらあらしく爆発的に叙述すると言の意味でもない。

苦悶の根源をじつと見すえる、臆することなく自己の苦悶の由つて来るところを凝視する、動揺して止まない心をおさえてむしろ冷静に非情に苦悶の源に眼を注ぐ、感情におぼれないで事の成り行きをじつと見守る、そしてこの様な身のこなし方によって人間の人格という奥深い底において行くことを言っているのである。

人間は静止する物ではない。

人間は状況の中で生きている。

“論理的に凝縮する”という場合、人間の人間に対する関心、別言するならある状況下にある人間に対する愛情がその中核を貫いていなければなるまい。そうでなかったら到底真の芸術、真の文芸はあり得ない。

誠に状況の中における人間の生きざまの切なる表現で

あつてこそ、その文芸は高い品格を持ち得るのではなからうか。(2)

実はここまで論じ来つて私は少々おもしろいのである。や、一人で力みかえつて“文学論”を展開したようであるから。

温山文全巻を読むとき、温山の詩文はいずれも平静な調子であつて緊張切迫した感はない。だからと言つて彼の詩文が品格がないわけではない。

やはりそれなりに整つた文芸の作品として私には写る。

温山が退官の心をつねに持っていた頃、三河田原藩の渡辺崋山はまた同じ心に迷つて苦しんでいる。彼は天保三年年寄役の末席に就く。天保七年秋大病を患つたせいもあるが天保九年病氣を理由にして退役願書を書くに至る。彼の場合同僚との意見対立がその原因の一つにもなつたであろうが、何よりも彼の場合絵画の道に専念したいという宿願がその大きな動機であつたようだ。しかし崋山の生涯には常に悲愁がただよふ。おそらくそれは彼の

生活が貧苦に終始したという事情によるものであろう。

温山の場合、崋山とはちがつて一応その生活は安定したものであつたようだ。そのことは「徙居有感」に於ても悲壯感よりむしろ閑人めいた感さえ感じられる所以でもある。

しかし温山は崋山と相似ておりまた異なる面がある。共に小藩、そして共に藩主に寵愛される、そしてまた同じく藩の重職の末席を汚す。しかしその生活の悲壯さはちがう。

そこに私は両者の対比に興味を感ずるのである。(私が今ここで崋山を持ち出したのは、この一年間講義に於て崋山にかゝつて来た事情による。それと共に、松平藩主墳墓の地本光寺の所在する愛知県幸田町深溝の地は、崋山の仕える藩三河湾を隔てた対岸の地渥美半島にある三宅藩の田原町とは遠くない。同じく江戸住いの両者、学者温山が学者崋山を知らなかったはずはないという私の推量もかゝわっている。)

温山の心のあらしは実は華山が退役願書を書いた天保九年頃に來たものと思う。

詳しく言うならば、大塩平八郎の乱が起きたのが天保八年、温山は彼が贈られた決心洞劄記に友情あふれる読後感をのべた書簡を書いた人である、その文章が公になったのは天保六年のことである、面接したことはないとしても温山は大塩と友人としては親しい、このような事情は、松平藩士川北温山の身辺に何らかの変動を与えないはずはなかろう。

温山はここに至って彼の生涯かつて味ったことのない緊張感を抱いたにちがいない。

私はここに温山の生涯における一大変動期を見る。この場合温山はどの様に生きようとしたのか。

後章に説くところであるが、私は温山の大著原城紀事の作成の動機をこのあたりにおくのである。

注

(1) 〇辞源（金田一京助）三省堂

〇修訂大日本国語辞典（上田萬年・松井簡治）富山房

〇広辞苑（新村出）岩波書店

〇平凡社『大百科事典第四卷』（初版は昭和七年六月）昭和二十七年三月縮刷版

〇平凡社『世界大百科辞典第七卷』（昭和四十年八月十日刊）

〇字源（簡野道明）北辰館

〇大漢和辞典（諸橋轍次）大修館書店

〇舒新城等『辞海』（中華書局・中華民國三十六年刊）

(2) 文学については多くの書物を参考したがその中主なものは

〇厨川白村全集『第二卷所収「苦悶の象徴」』改

造社（昭和四年刊）

○吉江喬松全集／第八卷所収「文芸汎論」／白水社（昭和十八年刊）

○詩と永遠（吉川幸次郎・梅原猛）／雄渾社（昭和四十二年九月十日）

○文学（成瀬無極）／慶大通信教育教材

○Kolin George Cllingwood／三浦修訳「芸術哲学概論」／紀井国屋書店（昭和四十三年十一月三十一日）

追記、

○川北温山の墓所は今の所明らかにしていない。

おそらくは秘鑑抄に見える島原藩に關係の深い増上寺・王窓寺（青山）・宝泉寺（牛込）の中、増上寺を除く後記二寺の中にあるものと私は見当をつけている。

○本間游清については、松崎慊堂がその日記、天保八年正月二十九日の中に、本間の和歌を三首メモ風に記しているのを、今のところ知るのみである。（平凡社東洋文庫／慊堂日歴5／一八九〇・五・二三刊山田琢訳注本）